

I. 世界と地域を結ぶ研究機関への飛躍をめざして

近畿大学附属農場は、1952（昭和 27）年に本学の創始者である世耕弘一先生の科学の力をもって農業分野で地域に貢献するという強い使命感のもとに、農業技術の発展のための教育・研究機関として、湯浅の地に農芸化学研究所という名称で生まれました。とはいえ、与えられた当時の土地は、雑木と雑草が生い茂る低丘陵地でした。しかし、恵まれた土地での栽培は当たり前だが、悪条件の土地を科学技術で改良することこそが大学人としての使命である！との先生の思いから、アメリカ製の土木建設機械を用いて、現在の農地を作り上げられました。

1957（昭和 32）年には現在の生石農場が新設、1958（昭和 33）年には農学部設置に伴って附属農場（湯浅農場・生石農場）に名称が変更されました。1961（昭和 36）年には現在につづくウンシュウミカンの栽培が始まりました。1987（昭和 62）年には本州ではいち早くマンゴーの栽培、育種の研究に着手し、2008（平成 20）年、我が国のマンゴー新品種第 1 号となる‘愛紅’が品種登録されました。開設以来、ウンシュウミカン、マンゴー、イネ、ウメ、アイガモ等を中心に研究を続け、さらには柑橘遺伝資源保存園を整備し、地域の企業を中心に受託研究・コラボレーションを重ねながら現在に至っています。そして、2022（令和 4）年、近畿大学附属農場は開設 70 周年を迎えることができました。この記念すべき年に、最新の機器を備えた研究室と、学生の宿泊施設が一体になった新本館が完成し、5 月には学内外の関係者、地域の方々を迎え、開所式・オープンファームを盛大に執り行うことができました。

2022 年は奇しくも我が国にとって激動の年でした。ユーラシア大陸の西側で始まった戦争は世界に食糧やエネルギーの高騰をもたらし、遠く離れた我が国にも大きな影響を及ぼしています。このことは、特に食料やエネルギーの安定供給の重要性を改めて認識させることとなりました。さらに気候温暖化の影響はますます進んでいます。かつては入学式のシンボルであった桜の花は、今日では卒業式のシンボルとなっています。国内的には、高齢化はますます進み、農業をいかに軽労化させるか、新規就農者をいかに農業に取り込むか、一次産業を基盤とする新たな産業でどのように地域を支えるかということも、地域の現状維持および更なる活性化のためにも重要な課題となっています。

このような状況の変化に対応するために、近畿大学附属農場は世耕弘一先生の理念と情熱を受け継ぎながら、農業のスマート化研究、気候温暖化に対応した新規作物の導入、6 次産業化の推進、未利用資源の活用などの新たな研究・教育に傾注してまいります。新たな研究・教育に、地域とともに教職員一体で取り組みたいと思います。

附属農場長
重岡 成